

本江畠田Ⅰ遺跡発掘調査報告

—県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財包蔵地の発掘調査報告—

1997年3月
大門町教育委員会

序

豊かな自然に恵まれた大門町には、古くより先人が生活した足跡としての遺跡が数多く存在します。これらの遺跡は郷上の歴史を知る上でかけがえのない史料であり、当時の生活や先人の苦労を偲ぶことのできる貴重な文化遺産であります。

ところが、土地改良事業や企業団地の造成など、大型開発が次々に実施されるなかで、貴重な文化遺産が消滅していこうとしています。

そこで私達は、祖先の遺した文化遺産を保護、保存し、後世に伝えることが重要な使命であり、そのことが、眞の郷上の発展につながるものと考え、この報告書をまとめたものであります。

この報告書が、多くの人々に活用され、地域の歴史の理解と文化財保護の一助となることを願ってやみません。

終りに、調査にご援助並びにご協力いただきました地元の方々及び、富山県埋蔵文化財センターをはじめとする関係諸機関の方々に厚く御礼申し上げます。

平成9年3月

大門町教育委員会
教育長 野 上 和 雄

例　　言

- 1 本書は、富山県射水郡大門町に所在する本江畠田Ⅰ遺跡の発掘調査報告である。
- 2 調査は、県営は場整備事業の実施に先立つ、本調査である。
- 3 調査期間は1996年5月17日～8月14日、調査面積は500m²である。
- 4 調査は、富山県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て大門町教育委員会が実施した。調査は大門町教育委員会主事 尾野寺克実が担当し、一部、県埋蔵文化財センターより職員の派遣も得た。
- 5 本書の編集・執筆は、尾野寺克実が行った。
- 6 調査から本書の作成に至るまで、下記の方々から有益な御教示を得た。記して感謝の意を表す。
岸本雅敏・宇野隆夫・上野章・宮田進・安忍幹倫・高梨清志・越前慶祐（敬省略）
- 7 発掘調査作業には（社）大門町シルバー人材センターの御協力を得た。
- 8 遺物整理、報告書作成作業参加者は次のとおりである。
田中慎太郎・田中幸生・中谷正和・平井晶子・山崎雅恵・浅野良治・小島あづさ・春名理史・小幡鮎子・西村倫子・荒木慎也・廣瀬直樹・砂田哲司・高橋泰雄
- 9 遺構図の一点破線は、切合関係にあつて壊されている遺構を示し、破線間は搅乱を受けて遺構の検出ができなかつた範囲を示す。

目　　次

序	(1) 縄文・古墳時代の遺構と遺物	4
例言	a 遺構	4
目次	b 遺物	4
挿図目次	(2) 中世の遺構と遺物	7
図版目次	a 遺構	7
I 序章	b 遺物	7
1 遺跡の位置と環境	(3) その他の遺物	7
2 調査に至る経緯	IIIまとめ	8
II 調査の概要	1 縄文・古墳時代	8
1 調査の経過	2 中世	8
2 層位	参考文献	
3 遺構と遺物	写真図版	

挿図目次

第1図 位置と周辺の遺跡	1
第2図 調査対象地区割図	3
第3図 基本層序模式図	3
第4図 縄文・古墳時代遺構全体図	5
第5図 中世遺構全体図	9
第6図 出土遺物実測図	10

図版目次

図版1 調査区全景・中世遺構検出面全景
図版2 遺構（中世）
図版3 遺構（縄文・弥生）
図版4 出土遺物

I 序 章

1 遺跡の位置と環境（第1図）

大門町は、県の中央北部、射水平野の南西端に位置し、東は小杉町、西・南は高岡市、北は大島町に接している。地形的には、庄川右岸の扇状地と、丘陵地からなり、和田川が貫流している。

今回、発掘調査を行った本江畠田Ⅰ遺跡は、西に和田川が流れる扇状地上、標高85m～91mの間に位置する。本江畠田Ⅰ遺跡周辺の平野部は、遺跡の密集地となっている。そのほとんどが、弥生以降に形成されており、当遺跡もその中のひとつに数えられる。

また、当遺跡内では、県営ほ場整備事業に伴う試掘調査時に、今回の調査地から一般地方道西押川・宮ヶ谷・大門線を挟んで隣接する西側のほ場より玉の未製品が出土し、地元住民からは、現射水建設業会館所在地には、墳丘のような盛り上がりがあったとの話も得ており、興味が引かれる。



第1図 位置と周辺の遺跡

1.本江畠田Ⅱ	2.本江大坪Ⅰ	3.棚田	4.本江大坪Ⅱ	5.本江宮田	6.八塚C	7.八塚
8.八塚土田	9.二口油免	10.二口五反田	11.二口	12.安吉	13.本田天水	14.本田宮田
15.本田畠田	16.本田杉田	17.布目沢北	18.布目沢東	19.布目沢		

2 調査に至る経緯

富山県農林水産部高岡農地林務事務所は、平成4年度より8年度まで、大門町東部で県営は場整備事業を行った。町教育委員会では、工事に先立ち、富山県埋蔵文化財センターの協力を得て、試掘調査を実施してきた。確認した埋蔵文化財包蔵地は、造構面及び、遺物包含層に傷をつけないように計画変更を高岡農地林務事務所に求め、その理解を得て保護してきた。

しかし、は場整備事業では、本江地区の埋蔵文化財包蔵地において、農道の改良工事を行うこととなつた。これは、幅員2mの未舗装道路を幅員5mの舗装道路に拡幅するもので、路線延長は460mである。町教育委員会は、高岡農地林務事務所・県教育委員会の三者でその取り扱いについて協議し、工事に先立ち、本調査を実施することとなつた。

II 調査の概要

1 調査の経過（第2図）

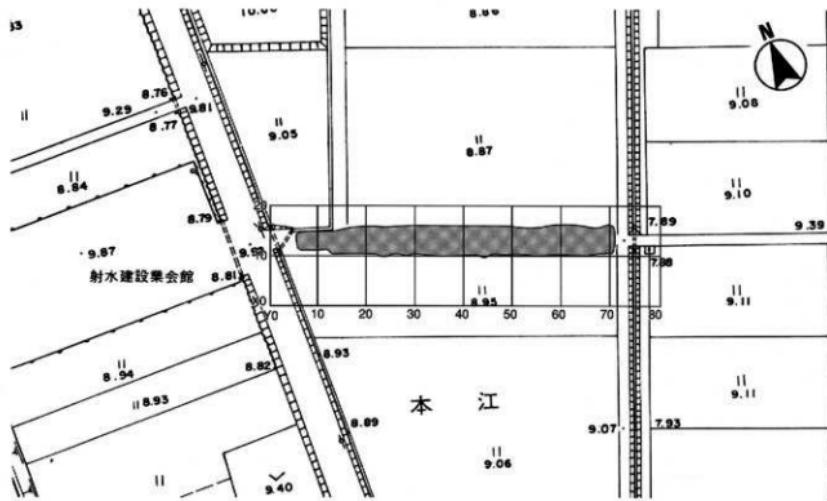
任意で今回の調査地全体にわたる5×5mグリッドを組み、南北方向にX0～20、東西方向にY0～80までを設定した。調査面積は500m²である。5月17日、重機による表土掘削開始。5月24日より発掘調査にかかる。排水溝を掘った後に調査にかかる。調査区西側より順に残った床土を除去していく。Y40～59までは旧農道造成時の掘り込みによって消滅していた。6月4日、調査区南側、Y軸方向にサブトレンチを設定し、弥生土器確認。遺構面が2枚あることが分かる。7月2日、遺構半裁始める。井戸2基確認。7月12日、遺構平面図を取り始め、終了後全景写真撮影。

遺構検出上面から下面までの層厚が90cm前後あり、その間の遺物の包含が認められなかつたため、7月23日、地山の上を10cmほど残す程度に再度重機による掘削を行う。U字溝より水がしみ出すため、調査区西端～Y12までの調査を断念し、土壌で水を塞き止め、そこを貯水池にする。7月30日、遺構掘削開始。7月31日、中世期の井戸3基確認。上面では旧農道の掘り込みによって擾乱を受けていた範囲内であったため、検出可能な面がかなり深くなったものと考えられる。内1基より、井筒確認。8月5日、井戸を完掘中、その内の1基から漆器碗が出上。井戸内の写真、平面図をとり、取り上げる。8月6日、遺構平面図をとり始める。8月8日、全景写真撮影。8月9日、調査区の層位図をY軸方向にとり、12日、井筒を取り上げ現地調査終了。8月14日、機材撤収。

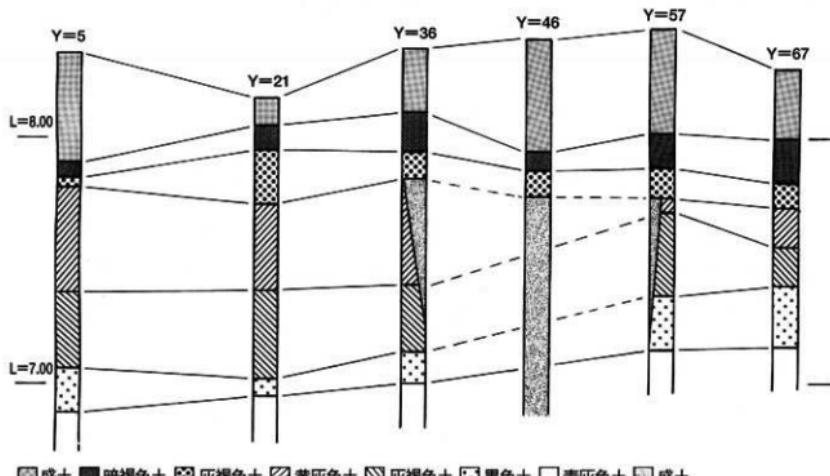
2 層位（第3図）

本地区的基本層位は、表層から、1層盛土、2層暗褐色土、3層灰褐色土、4層黄灰色土、5層灰褐色土、6層黒色土、7層青灰色土となる。

1層は、旧農道を形成していた盛土で、砂利が混じる。層厚は10～45cmを測る。2層暗褐色土は、旧農道造成以前の水田耕作上である。層厚は10～20cm。3層灰褐色土は、水田床土で、やや粘性をもつ。中世の遺物はここに包含する。層厚5～20cm。4層黄灰色土は、粘性が強い地山層である。中世の遺構は、この地山層上面より掘り込んで構築される。層厚15～40cm。5層灰褐色土は、粘性が強く、表面に露出すると、時間がたつにつれて黄味を帯びる。層厚15～25cm。6層黒色土は、シルト質で、弥生、古墳時代の遺物を包含する。層厚5～25cm。7層青灰色土は、粘性が強い地山層で、表面に露出すると、黄味を帯び、最終的に黄灰色になる。縄文、古墳時代の遺構はこの地山層上面より掘り込む。また、一部確認するに止まつたため、図上では表していないが、7層の下には、青灰色の砂土が存在する。



第2図 調査対象地区割図



第3図 基本層序模式図

本地区中央周辺は、床下より昭和初期の用水の掘り込みがあり、面積的に、4層では約3分の1、7層では約7分の1の遺構検出面が消失していた。そのため、この用水の走っていた箇所に存した中世の遺構は、7層で初めて確認できたものもある。また、昭和期のほ場整備の区画整理によって、4層は若干削り取られているようである。

3 遺構と遺物

(1) 繩文・古墳時代の遺構と遺物

7層青灰色土上面で検出できる遺構は縄文・古墳時代のものである。前段で述べたとおり、旧用水の掘り込みがこの面まで届くため、Y42～Y53までは遺構は残っていない。また、Y6～Y13までは隣接する既存の用水がしみ出すため、土壠で堰を造って貯水池としたので、遺構の確認ができなかった。

a 遺構（第4図）

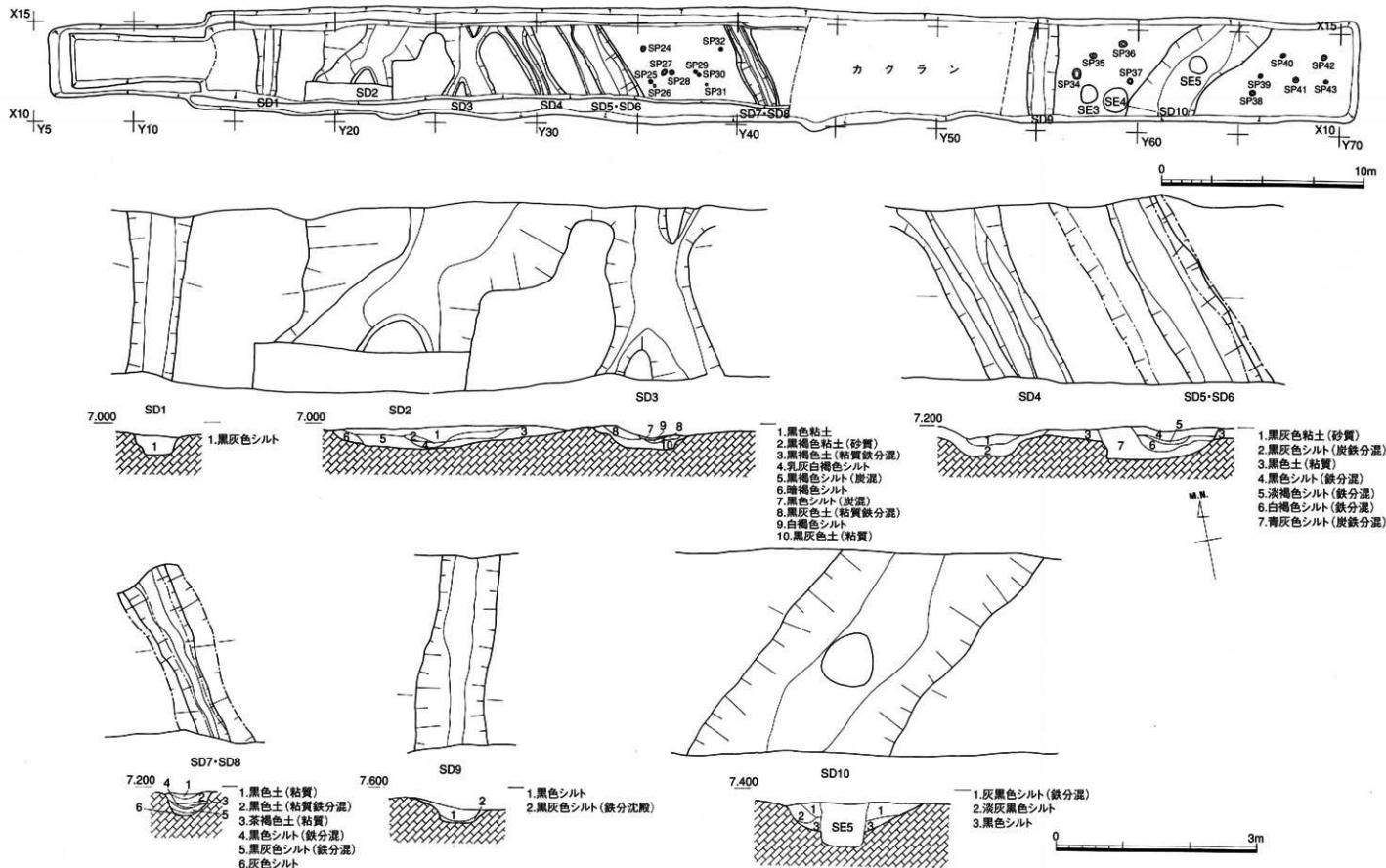
遺構は、溝・小ピットがある。その時代は、縄文時代晩期と古墳時代初頭に属するものであろう。溝は、全て北から南へぬけていく。以下、個別に遺構説明を行う。

- S D 1 Y16で検出した溝。幅80～140cm、深さ約30cmを測る。覆土から古墳時代の土師器が出土している。
S D 2 Y19～23間で検出した溝。幅300cm前後、深さ約30cmを測る。覆土から縄文土器が出土している。
S D 3 Y25～28間で検出した溝。幅400cm前後、深さ約20cmを測る。遺物は出土していない。
S D 4 Y28～30間で検出した溝。幅約120cm、深さ約35cmを測る。覆土から縄文土器が出土している。
S D 5 Y31～35間で検出した溝。幅約180cm、深さ約50cmを測る。S D 6と切り合い関係にあり、壊されている。覆土から縄文土器が出土している。
S D 6 Y32～35間で検出した溝。幅120cm前後、深さ約30cmを測る。遺物は出土していない。
S D 7 Y39～42間で検出した溝。幅90cm前後、深さ約35cmを測る。S D 8と切り合い関係にあり、壊されている。
S D 8 Y39～42間で検出した溝。幅90cm前後、深さ約20cmを測る。覆土から古墳時代の土師器が出土している。
S D 9 Y55で検出した溝。幅約100cm、深さ約20cmを測る。遺物は検出していない。
S D 10 Y60～66間で検出した溝。幅約240cm、深さ約30cmを測る。中世の井戸S E 5に切られている。遺物は出土していない。

その他、小ピット19基を確認している。

b 遺物（第6図）

- S D 1 1は古墳時代初頭の土師器の鉢である。口径8.8cmを測る。内面はハケ調整後、ナテを施す。
S D 2 2は縄文土器の粗製深鉢の口縁部である。口唇部に円形列点文を、内外面に条痕文を施す。中屋II式、もしくは下野I式に並行する。
S D 8 3は古墳時代初頭の土師器の甕の底部である。底径2.7cmを測る。
その他、図示できなかつたがSD4、SD5では縄文土器の体部破片が出土している。これらも中屋II式、もしくは、下野I式に並行するものであろう。



第4図 繩文・古墳時代遺構全体図

(2) 中世の遺構と遺物

4層黄灰土色上面で検出できる遺構は中世に属する。ここでも、旧用水の掘り込みによって、Y40～Y60までの遺構は消滅、または検出面が7層上面まで下がる。

a 遺構（第5図）

遺構は、土坑・井戸・小ピットがある。その全ては中世に属するものであろう。以下、個別に遺構説明を行う。

S E 1 X12 Y33で検出した井戸。平面形は直径88cmの円形をなす。深さは144cmを測る。埋土はほぼ水平に堆積している。覆土から、須恵器、土師器、鉄滓が出土しているが、混入品と思われる。

S E 2 X14 Y37で検出した井戸。平面形は直径144cmの円形をなす。深さは184cmを測る。埋土はほぼ水平に堆積している。覆土から、須恵器、土師器、鉄滓が出土しているが、混入品と思われる。

S E 3 X12 Y58で検出した井戸。平面形は直径112cmの円形をなす。深さは80cmを測るが、4層では旧用水の掘り込みが入るために7層上面での検出となった。井戸底には、曲物が設置してあり、水溜めとなっている。出土遺物には珠洲焼、土師器皿、不明土製品、箸、漆器椀があり、中世の井戸と考えられる。

S E 4 X12 Y59で検出した井戸。平面形は直径164cmの円形をなす。深さは82cmを測るが4層では旧用水の掘り込みが入るために7層上面での検出となった。出土遺物には珠洲焼があり、中世の井戸を考える。

S E 5 X13 Y62で検出した井戸。平面形は直径200cmの円形をなす。深さは268cmを測る。出土遺物には珠洲焼、土師器皿、鉄滓、箸があり、中世の井戸と考える。

S K 1 X14 Y33で検出した井戸。平面形は直径100cmの円形をなす。深さは82cmを測る。遺物は出土していない。

その他、4層上面では土坑1基、小ピット23基を確認している。

b 遺物（第6図）

S E 2 4は須恵器の壺の頸部破片である。

S E 3 5は不明土製品である。6は珠洲焼の体部破片である。叩き目は3cm当たり4条と非常に粗い。7は木製品の箸である。8は漆器椀である。口径14.0cm、器高4.1cm、底径9.0cmを測る。9は井筒として井戸底に設置してあった曲物である。最大径は50cm、残存高は24.0cmを測る。

S E 4 10は珠洲焼の壺の体部である。

S E 5 11は珠洲焼のすり鉢である。口径29.0cmを測る。珠洲Ⅳ期初頭に比定できる。12・13は珠洲焼のすり鉢の体部破片である。12は底径10.0cmを測る。

その他、図示できなかつたが、4層上面から掘り込む遺構に含まれる遺物は、S P 1、S P 6で土師器皿を確認している。

(3) その他の遺物（第6図）

遺構から出土した遺物の他に、2層、3層では古代および中世、6層では弥生、古墳時代の遺物の包含を確認できた。その中で図示できたものが若干あつたので、ここに記す。

14、15は土師器の壺である。14は口径8.0cmを測る。15は口径13.0cmを測り、口辺部に擬四線紋を施す。古墳時代初頭と考える。

16～18は弥生時代後期～古墳時代初頭の壺である。16は口径16.0cm、17は口径16.0cm、18は口径19.0cmを測る。これらは、有段口縁をもち、17は口辺部に擬凹線紋を施す。

19は5世紀代の土師器の小型丸底壺である。口径9.0cm、器高8.3cmを測る。

20は青磁の椀である。口縁部内面に残る文様は飛雲文の一部になると思われる。龍泉窯系椀I類で、12世紀のものと考える。

III　まとめ

最後に前章までの調査概要を簡単にとりまとめて、まとめとしたい。

1　縄文・古墳時代

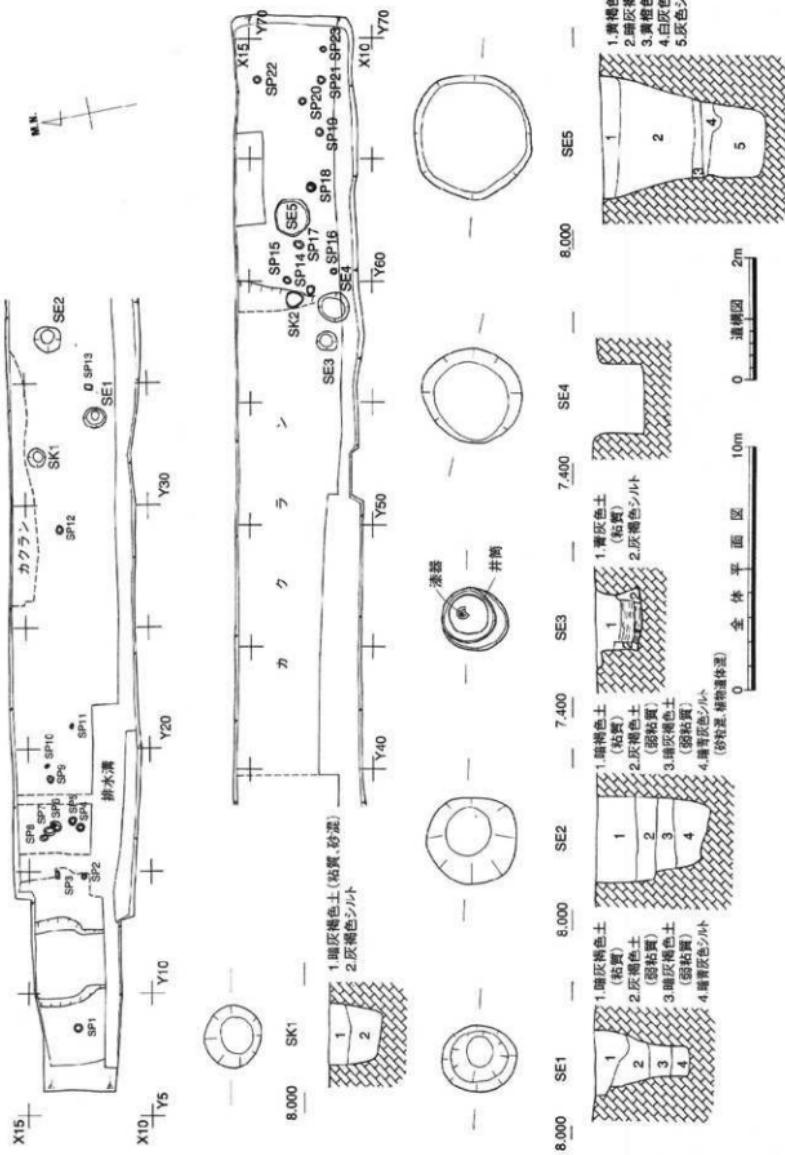
調査区を北から南へ向けて溝が横切り、その中に縄文時代晚期、古墳時代初頭の遺物が確認できた。また、この遺構面直上の包含層からは、弥生時代後期や、5世紀代に比定できる遺物も出土している。調査区内のこれらの時代の検出面は低湿地帯であり、地形や場整備事業の区画整理時の試掘調査結果から、調査区北西側に集落の広がりが予想される。

2　中世

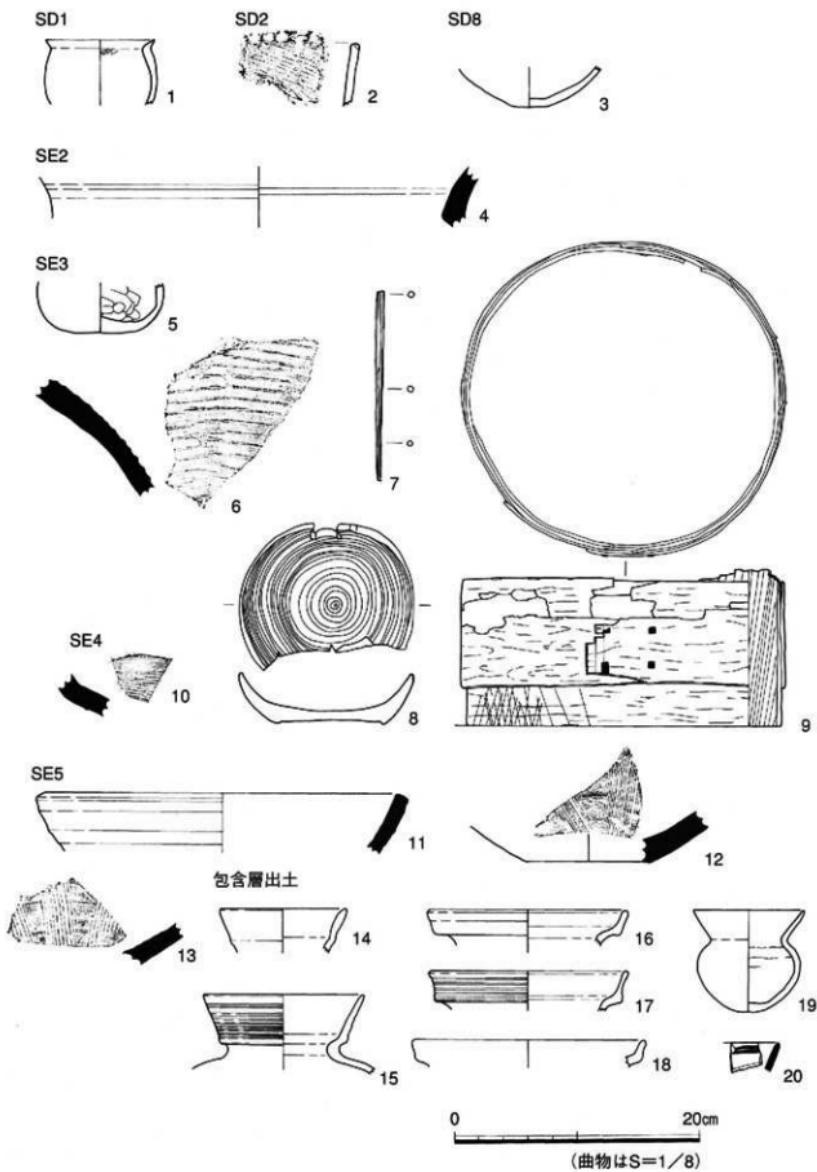
調査区中央へ東側で井戸を5基検出した。全て素掘りであり、中世のものと思われる。この時代の本体は北東側に位置しよう。

参考文献

- 石川県立埋蔵文化財センター 1986 「漆町遺跡Ⅰ」
石川県立埋蔵文化財センター 1989 「金沢市米泉遺跡」
金沢市教育委員会 1981 「金沢市中屋遺跡」
金沢市教育委員会 1986 「金沢市新保本町チカモリ遺跡 - 第4次発掘調査兼土器編」
国立歴史民族博物館 1993 「日本出土の貿易陶磁」
酒井重洋 1987 「井口村井口遺跡出土の縄文晚期の土器」「大境」第10号 富山考古学会
富山県教育委員会 1991 「北陸自動車道遺跡調査報告 - 朝日町編6 - 境A遺跡土器編」
富山県教育委員会 1992 「北陸自動車道遺跡調査報告 - 朝日町編7 - 境A遺跡土器編」
沼田啓太郎 1956 「旧石川郡安原村中屋遺跡調査報告」「石川考古学研究会会誌」第8号石川考古学研究会
能登町教育委員会 1986 「真鶴遺跡」
野々市町教育委員会 1983 「野々市町御経塚遺跡」
山崎政子 1969 「北陸地方の縄文時代晚期について」(1)『大境』第3号 富山考古学会
谷内尾普司 1983 「北加賀における古墳出現期の土器について」「北陸の考古学」
吉岡康暢 1971 「石川県下野遺跡の研究」「考古学雑誌」第56巻第4号 日本考古学会
吉岡康暢 1994 「中世須恵器の研究」 吉川弘文館
吉岡康暢 1991 「日本海域の土器・陶磁」 六興出版



第5図 中世遺構全体図



第5図 出土遺物実測図

図版 1

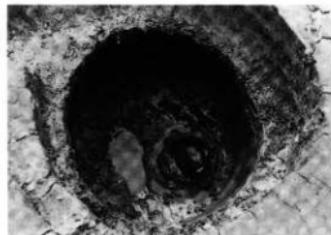


調査区全景



中世遺構
検出面全景

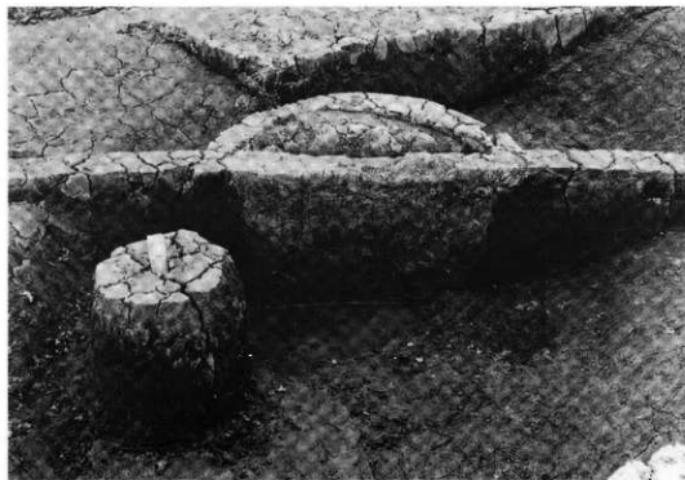
図版 2



左: SE1
右: SE3



SE3 曲物



SE5
(SD10) 断面

図版 3



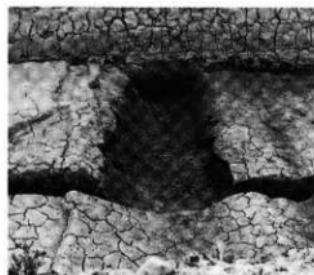
縄文・古墳時代
遺構検出面全景

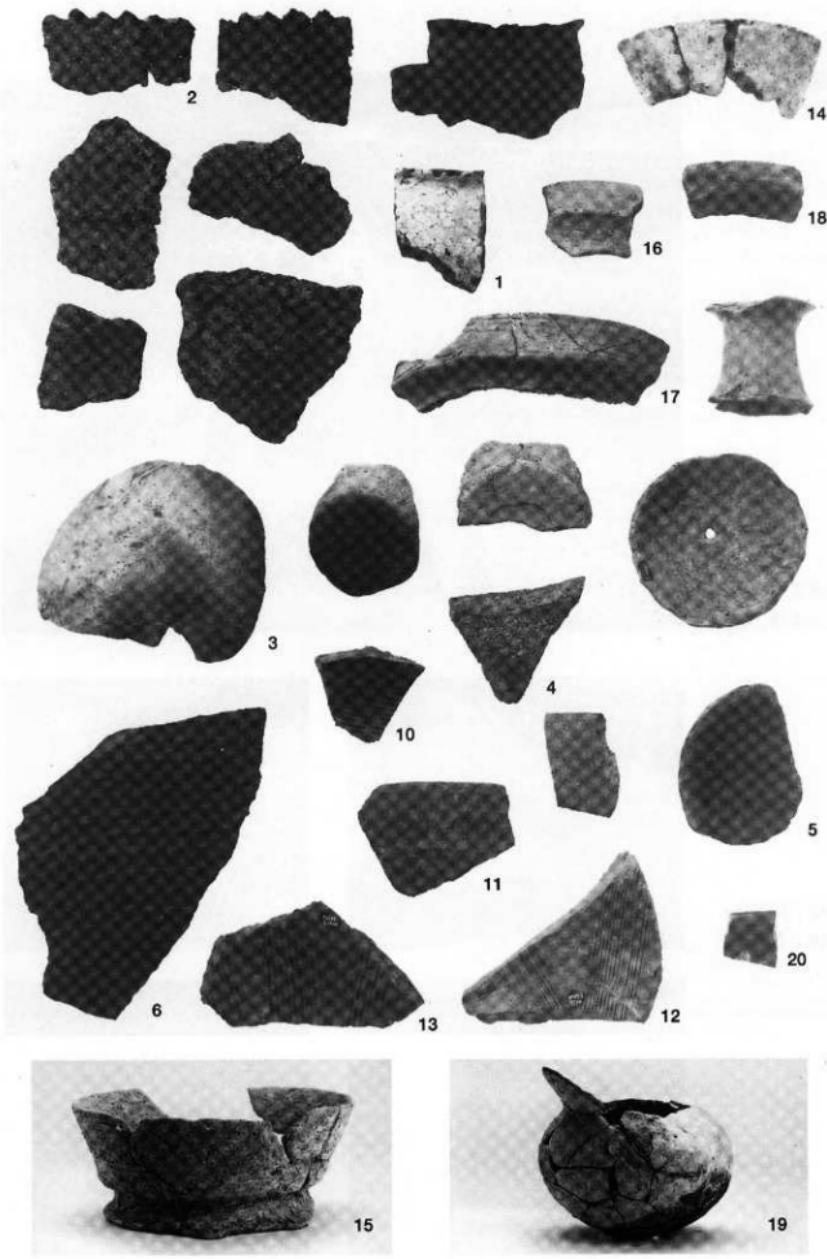


右: SD3
左: SD4



右: SD7
左: SD9





図版4 出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ほんごうはたけだいらいせきはつくつちょうほうこく
書名	本江畠田Ⅰ遺跡発掘調査報告
シリーズ名	大門町埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	10
編集者名	尾野寺克実
編集機関	大門町教育委員会
所在地	〒939-02 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964
発行機関	大門町教育委員会
所在地	〒939-02 富山県射水郡大門町二口1081 TEL0766-52-6964
発行年月日	西暦1997年3月21日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市	町村	°	′			
ほんごうはたけだいらいせき 本江畠田Ⅰ遺跡	とやオリんいみずくん 富山県射水郡 だいもんまちほんごう 大門町本江	163821	382057	36°43'03"	137°03'23"	960517 ~960814	500	県営は場 整備事業 に係る事 前調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本江畠田Ⅰ遺跡	集落遺跡	縄文 古墳 中世	井戸 溝 土坑 ピット	5基 縄文土器、弥生土器 土師器、須恵器、中 世土師器、珠洲、青 磁、不明土製品、木 製品、鉄滓	

平成9年3月21日発行

本江畠田Ⅰ遺跡発掘調査報告

- 県営は場整備事業に係る考古文化財包蔵地の発掘調査報告 -

編集 大門町教育委員会

発行 大門町教育委員会

富山県射水郡大門町二口1081

印刷 株式会社高岡

